

「わが国における小児歯科 医学の今日、そして明日」



コメンテーター
東京都葛飾区歯科医師会

会長 神代達司

■ 略歴

昭和 33 年 3 月	九州歯科大学卒業
昭和 42 年 2 月	医学博士
昭和 42 年 7 月	葛飾区龜有 3-2-9 に神代歯科医院開設
昭和 62 年 4 月	九州歯科大学非常勤講師（社会歯科学）
昭和 62 年 4 月～	葛飾区歯科医師連盟会長
平成 9 年 3 月迄	葛飾区歯科医師会会长
平成 9 年 4 月	九州歯科大学同窓会本部 副会長 現在に至る
平成 4 年 7 月	

● 日本の社会構造や社会環境の変革について。

高齢社会や少子社会の出現によって、核家族問題、年金問題、さらに介護問題等、これまで予想もされなかった諸問題が惹起されている。これらの問題に対して如何に対処すべきであろうか。

● 日本の医療、特に歯科医療をとりまく環境や構造の変革について。

昭和36年「国民皆保険制度」が施行されわが国の医療のあり方が大きく変った。「いつでも、どこでも、安い医療費で医療が受けられる」という国民皆保険は、医療需要の異常な増大をまねき、その対策として多くの医科や歯科の大学が新設された。と同時に医師対患者という医療の本来の姿が変り、健康保険制度の施行によって、行政や健保組合という第三者の介在をみるようになった。つまり疾病構造の変革によって、個から集団へとさま変りしたのである。

● WHOのバームス口腔衛生部長は、1990年3月、日歯会館において「歯科医療の将来を語る」という講演を行い、WHOの見解を示した。

WHOは21世紀の初期段階（2025年頃）で先進国のう蝕数の低下と、発展途上国のう蝕数の増加のクロスするポイントが「3」であるという数字を示した。今後先進国では、年々この DMF は「3」より低下（減少）し、途上国では、逆に急増するであろうと考えられる。将来的には、予防処置としてフッ素やシーラント以外に新しいマテリアルが開発されるであろうし、歯周疾患も、2025年頃にはきわめて少なくなると考えられる。

地域医療活動も2025年頃には、子供から成人や高齢者にその対象が変るであろうし、学校歯科に代って成人歯科教育が重視されるであろうと考えられる。つまり小児歯科の前途に対する明るい材料はないと言えるのではないか。

● 21世紀の小児歯科医学のあり方を考える。

従来の小児歯科のあり方を根元的に見直しを行ない、障害児歯科、歯科矯正、学校歯科、さらに予防歯科等の「枠」を取り払って、総合的保健衛生の一端を担う新しい小児（児童）歯科医療を開拓することが求められている。

そのためには、国民の児童に対する歯科医療のニーズは何かを明確に把握すべきであろう。